

平成30年度 学校評価報告書

平成31年 3月 25日
宮城県立支援学校女川高等学園
校長 須藤 博之

学校教育目標	
一人一人の人格と個性を尊重しながら、生徒の特性に応じた適切な職業教育を行い、自己のもつ能力や可能性を伸ばし、社会的・職業的に自立できる心身ともに健康で、誰からも愛される生徒を育成する。	
本年度の重点目標	
- 一人一人の生徒の実態に応じた、学習指導・生活指導・進路指導の充実を図る。 - 地域と綿密な連携を図りながら、地域に貢献できる生徒を育成する。 - 特別支援学校のセンターの機能を充実させ、特別支援教育の理解啓発に努める。 - 地域の防災計画等との整合性を図りながら、生徒及び保護者にとって安全・安心な教育環境を整える。	

成果と課題・改善方策（学校評価アンケートより各校務分掌による分析）				
	＜教務部＞	＜総務部＞	＜進路指導部＞	＜生活指導部＞
成 果	・完成年度を迎えて難しい日程調整もあったが、各分掌部や各学年の先生方と調整は図りながら計画通りに教育活動を進めることができた。特に校内研究の研究授業および検討会の持ち方については、工夫して時間設定することができた。	・1学年から3学年まで生徒が揃った中で、入学式や始業式、第一学期終業式などを整然と行うことができた。昨年度からの全校集会も定着して行うことができた。PTA活動でも3学年が揃い、全体での各種行事の参加者数が増えた。	・生徒や保護者との進路相談は、個人のケースにおいても丁寧に対応してきた。進路指導部員の連携と情報の共有を密に行った成果と感している。また、今年度初めての卒業生を出すに当たり、進路決定までの流れ等保護者対象の説明会を行ったり、生徒へは個別の教材の工夫や対応をしっかりと行ったりしたので、順調に進路が決定していると考えている。	・生徒心得を活用し、ルールや決まりについて生徒や保護者に対して周知することができた。また、昨年の反省から、部活動の活発な取り組みを呼びかけ、対外試合や各種大会に参加し、好成績を収めることができた。さらに、登下校時の指導に重点を置き、JR乗車指導を行い、登下校時のトラブルの未然防止に取り組んだ。その他、年間4回の「いじめアンケート」を実施し、いじめに繋がる情報収集を行い、いじめの未然防止に取り組んだ。
課 題 ・ 改 善 方 策	・教職員の専門性を生かした指導体制を整えていく必要がある。通常教科の指導と3コースに及ぶ専門教科の指導を進める上で高等学園として理想的な配置を検討していかなければならない。そのためにも、教科部会やコース会の意見をしっかりと受け止めながら時間設定を行っていきたい。 ・教務部という組織がまだ機能していない部分が多いので、適切な役割分担や配置を考えて効果的な運営を行っていく必要がある。	・これまでは全校集会などで教師主導の進行が多かったが、今後は生徒会（生活指導部）とも連携し、徐々に生徒の自主性を生かせるような場面も増やしていきたい。 ・PTA活動でも全学年が揃い、各種行事の参加は全体数では増えた。しかしながら、一期生保護者の参加が多く、低学年になるにつれ参加率が落ちた。これまでは、一期生の保護者による役員が多かったことが理由として考えられるため、来年度は役員の所属学年も満遍なく配置できるように検討し、各学年の行事参加率を上げられるように働き掛けていきたい。 ・開校から3年を経て、各種行事も一巡した。これまでの反省を受け、行事内容等の見直しを図っていきたい。	・教職員対象の評価では、各教科での進路指導が不十分という結果が読み取れる。実習等の評価を分析し、生徒一人一人の課題とその解決策を、生徒と共に考えた結果をまとめ、学年の先生方に配付した。そのように指導への協力を求めてきたがまだまだねらいがうまく伝わっていないようだ。全員が生徒のニーズを把握し、その解決策をどの場面でもの様に指導するかを丁寧に伝えていきたい。	・生徒会が中心となり、生徒心得の遵守の呼び掛けを行い、生活指導の徹底を図った。また、昨年の反省から、定期的ないじめアンケート後にアンケートへの記載者や気になる生徒を対象に面談を行い、気軽に相談できる体制を整えてきた。面談体制を整えたことでより一層生徒との信頼関係が築けた。1年を通して、職員によるJR乗車指導を行い、他校とのトラブルの未然防止に努めた。今後も継続指導が必要である。
	＜保健給食部＞	＜地域支援部＞	＜研究部＞	＜図書情報教育部＞
成 果	・生徒の課題や実態に合わせて保健指導や講話等を展開できた。また、保健講話や保健便りを通して情報の発信に努めた。 ・授業と連携し校内の環境衛生活動、美化を適切に行うことができた。 ・食に関する指導について、食育授業の実施や給食時の栄養教諭の話から生徒の食への関心を高めることができた。また、保護者へも給食試食会や食育便りて情報発信に努めた。	・外部講師による研修会を3回行い、教職員の専門性と資質向上に努め、肯定的な評価が高くなった。 ・先生方の興味関心や今必要としている研修内容で、一方的な講義形式ではなく、具体的な支援方法や質疑応答しながらの分かりやすいものであった。	・研究授業を通して、学年での事前検討会で協力して指導案を作成し、「みんなで授業を作る」という意識を持って取り組むことができた。また、事前・事後検討会をもつことや特別時間割を組んでみんなで授業を見ることで、自立活動についての理解が深まり、自立活動を取り入れた授業をしようという意識を高めることができた。自立活動に関する研修会や自活についての「おたより」をだし、職員にお知らせしたことでも自立活動に関する理解を深めることと共通理解が図れた。	・ICT機器は十分に整備され、運用されている。 ・図書委員会が中心となって図書室運営を行うことができた。生徒たちは、貸出業務や本の紹介など積極的に参加した。
課 題 ・ 改 善 方 策	・病気や怪我への対応について適切に対応されていると評価されているが、一部の生徒から否定的な評価が得られた。対応時の指導やすめに対して納得できずにいることが考えられる。 ・疾病の予防や健康教育については保健指導だけでなく授業等でも扱っているが、否定的な評価が見られる。子どもたちとの関心にずれがあることも考え、ニーズを吸い上げる方法を検討したい。 ・悩みや心の問題への対応については、SCについては順調に機能していると考えられるが教員が忙しすぎて生徒が悩みを相談しづらい状況があると考えられる。	・先生方が全員参加できるような日程について検討する。 ・教職員の専門性向上やニーズに応じた研修会の企画・運営に努める。	・全体的に見通しをもって研究を進めることが難しかったため、研究を意識していない、役割が分からないという人が見られたと思う。 ・研究授業の事前から事後までの全員参加体制、研究部からの発信による現在の進捗状況や事後報告を行うことにより、全体研究の共通理解を図っていく。来年度は全国公開もあるので、スムーズに本番を迎えられる計画を立てることが必要だと考える。 ・また、自活の指導については、今年度末から来年度にかけて実践しながら本校独自の基礎を築いていく。	・1、2年生からインターネット環境について否定的な評価を得た。現在の県立学校においては校内無線LANが整備されていない学校が多数を占めており、本校の現状は十分に恵まれた環境であることを伝える必要があると感じている。 ・図書室に読みたい本がないという評価が多かった。購入希望アンケートを行い図書の購入に努めたい。
	＜舍務部＞	＜事務部＞		
成 果	・県下最大の入舎生数の中で、大きな事故を回避しながら運営できた。学校と寄宿舎の連携と協力が図られた結果と捉えている。 ・生徒の自治会活動の充実を図ることができた。特に学校行事と連動し、地域と協力して総合防災訓練を成功裏に納めることができた。	・アンケート結果では「事務処理が概ね円滑に行われている」、「事務処理に関する共通理解が十分になされている」との評価を受け、外部への報告期限等についてもクリアしている。今後ともこの状況を維持していきたい。		
課 題 ・ 改 善 方 策	・生徒と指導員との関わりを評価する項目において、2学年生徒の肯定値が低い傾向にあった。中堅学年の生徒が抱く感情を読み解く必要性と生徒個々に対応した相談の在り方について研修を重ねたい。 ・担任と舎担との役割分担の確認を基本に、学校内における寄宿舎指導員の役割について、より明確に発信するように努めたい。 ・生活環境の静寂な時間を保証するために、音楽プレーヤーやスピーカー等の試用についての一定の使用制限を設ける。 ・学校評価で示された数値や記述を意識しながら、より良い次年度に向けて今後の準備を進めたい。	・成果として「事務処理が概ね円滑に行われている」ことをあげましたが、あまりそう思わないという回答もあったので、事務処理をより一層円滑に進められるようにしていきたい。		